# 短期大学学生調査の改訂及びその実施と運用方法に関する研究

○堺完（同志社大学大学院）
○山崎慎一（桜美林大学総合研究機構）
山田礼子（同志社大学）
舘昭（桜美林大学）

日本高等教育学会第17回大会＠大阪大学
2014.06.29

# 発表概要

短期大学の現状把握とさらなる発展を支える1つのツールとして開発が進められてきた短期大学学生調査（JJCSS）の改良プロセスとその意義について報告をする

- 目的―研究成果の有効化及び定着の事例研究の成果
- 対象―短大生調査の作成プロセス及び運用方法
- 結果―目的を達成するためのポイント

# 問題意識

- 調査の運用・実施のいずれにおいても、無理のない範囲で、継続的に改善できるシステムを作ることが大切
- 使われなければ意味がない。研究者だけが理解をしてもしょうがない
- 実際にデータを扱う現場の人が「実感」として価値を理解できない限りは、どんな調査も大した意味をなさないのではないか
- 学生調査によって短大の教育の質の改善活動を促進するという視点が必要

# 研究組織の概要

## 短期大学基準協会

調査研究委員会
大学・短大の教員を中心に
10名程度のメンバーで構成
年2回の委員会を実施
（委員長は舘昭教授）

分析チーム（2名）
・調査結果の分析
・報告書の作成
・調査項目の検討
・関連の研究活動

＋

## JCIRP

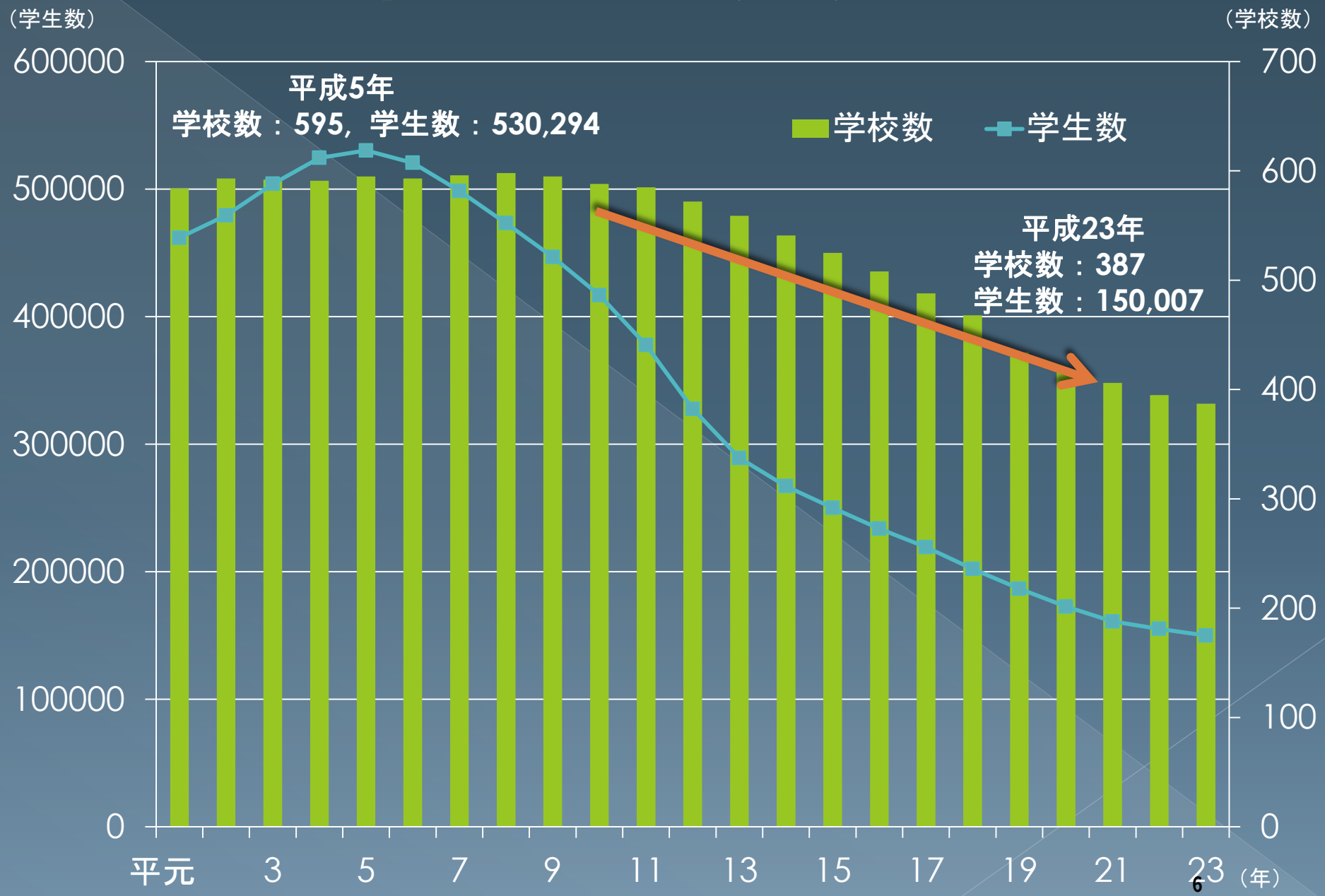
JCIRP研究チーム
研究者から構成
（リーダー：
山田礼子教授）

研究成果のJJCSSへの応用

調査結果の研究利用を推進

# 背景

# 短期大学の状況（１）


（学生数）
（学校数）
600000
500000
400000
300000
200000
100000
0
700
600
500
400
300
200
100
0
平成5年
学校数：595，学生数：530,294
学校数
学生数
平成23年
学校数：387
学生数：150,007
平元
3
5
7
9
11
13
15
17
19
21
23
（年）

# 短期大学の状況（２）

- 地域における重要性
- 短期高等教育へのニーズ（社会的・経済的）
- 職員の複数部門のかけもちが普通
- 小規模・小人員
- 進学率減少は高等教育機関共通の問題

# 教育の質保証：第一ステージから第二・第三ステージへ

- 第一ステージ：シラバス、GPA制度、CAP制、学生調査等を導入してきた今までの各大学の取組

- 第二ステージ：ＩＲ機能の充実、ＩＲを活用した評価、その評価結果を単位の実質化、学生の学習時間の確保に結びつける教育環境の整備の段階

- 第三ステージ：データの結果と評価を教育に還元

# 質保証の一環としてのデータの活用

- 何を教えるかから何ができるかに発想を転換
- 学生の現状を客観的データから把握
- 学生の高校時代の情報と現状とを関連づけて分析
- アウトカムとカリキュラム、あるいは授業とを関連づけて分析
- 授業評価と学生データとを関連づけて分析
- 教員のＦＤに学生データを活用

↓

<u>カリキュラムの見直し、教授法の見直し</u>

# JJCSSについて

# 短期大学学生調査（JJCSS）とは・1

- Japanese Junior College Student Survey

2008年度より開始

・研究開発機関

短期大学基準協会調査研究委員会

大学生調査研究プログラム （JCIRP）

＊JCIRP

（Japanese Cooperative Institutional Research Program ）
同志社大学の山田礼子教授をリーダーとするプログラム

アメリカのUCLA高等教育研究所の実施するCIRPを模範

# JCIRP研究のこれまでの目的と特徴

- 学生の成長を測定する学生調査の意味、学生の成長を支える高等教育機関の効果の測定の開発
- 研究の特徴：アメリカで蓄積されてきたカレッジ・インパクト研究の流れをベースにアスティンのI-E-O(既得ー環境ー成果)モデルに依拠しつつ、大学生への教育効果･成果について検討

  <u>カレッジ・インパクトモデルの検証と発展</u>
- アメリカの学生調査と互換性のある調査の開発と実施

# 短期大学学生調査（JJCSS）とは・2

- 短期大学基準協会の調査研究委員会とJCIRP研究チームが協同で実施

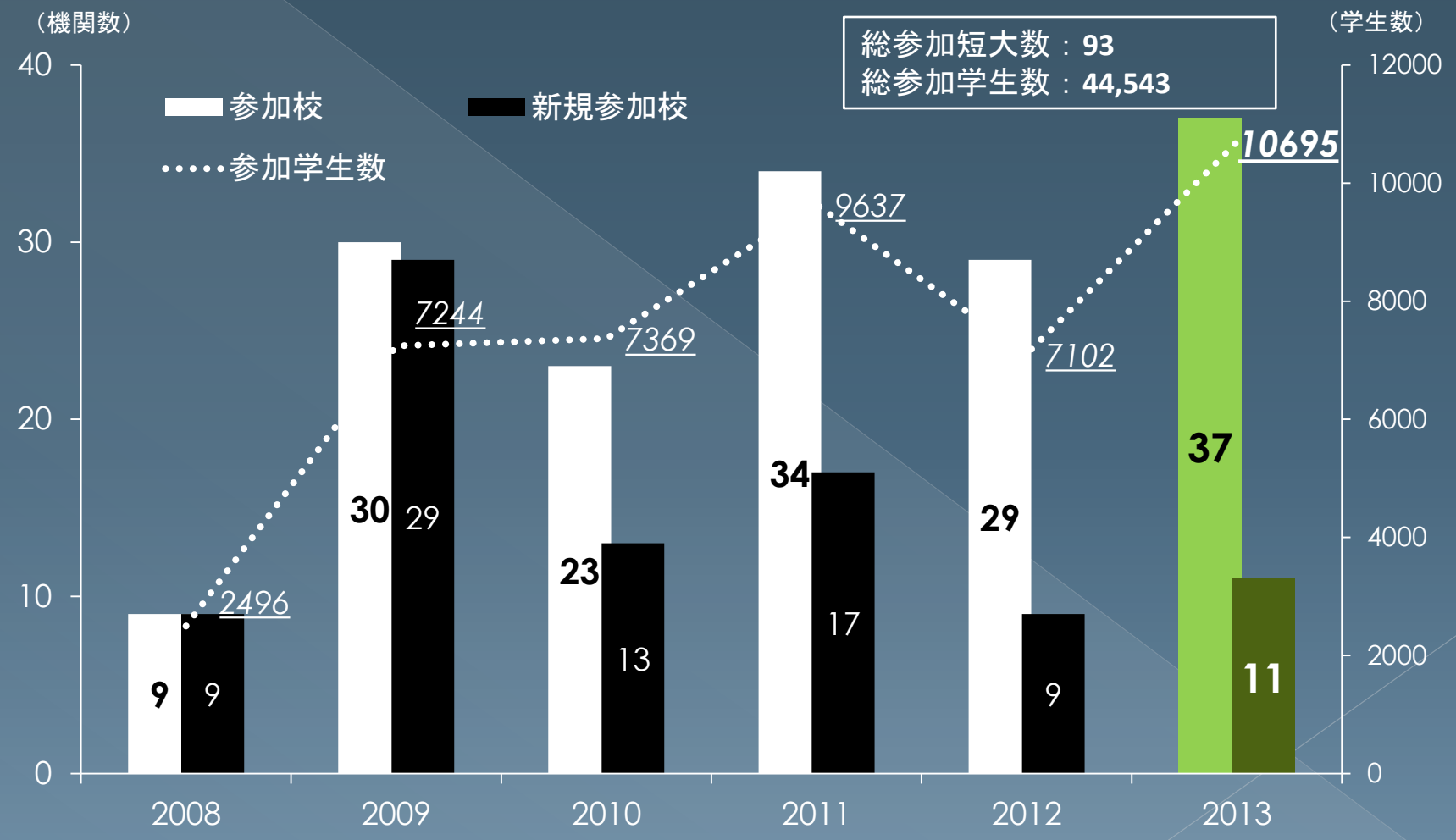
- 短期大学は四年制大学に比べ、2～3年間の短い課程の中で、学生の成長を検証する必要

⇒逆に短いからこそ、教育目標の設定やその効果の測定を行えば、教育方法やカリキュラム改善につなげやすい

＝間接評価としての学生調査の可能性

- 短大自ら自己改善・自己評価につなげられる資料（データ）として短大生調査を実施

# JJCSSの利用状況


（機関数）
（学生数）
参加校
新規参加校
参加学生数
総参加短大数：93
総参加学生数：44,543
40
30
20
10
0
12000
10000
8000
6000
4000
2000
0
2496
7244
7369
9637
7102
10695
9
9
30
29
23
13
34
17
29
9
37
11
2008
2009
2010
2011
2012
2013

# 短大生調査の改訂プロセス

JJCSS
実施後
アンケート

→

ヒアリング
調査

→

試行調査
作成

→

試行調査
実施

→

新調査票
作成

# これまでの調査実施後アンケートでは

- 「調査項目が多い」、「数が多いので何が調査目的かわからない」、「回答に時間がかかる」といった意見が毎年見られる

⇒　短大生調査の設問を減らすなど、調査票の見直しが急務（回答者である学生の負担や、参加校の労力を軽減するため）

⇔　ただ、短大側にどのようなニーズがあるのか、できるだけ把握した上で設問を減らしたい

◎　短大の実施担当者にヒアリング調査を実施

# ヒアリング調査の概要

【調査目的】

1. 短大生調査参加目的や理由

→　どんなことを調査を通じて知りたいか

2. 調査データを活用状況

→　フィードバックした学生データをどう活用したか

3. 短大生調査（JJCSS）に対する要望や意見

⇒　データ活用と調査ニーズを把握し、より短大の実情に合った調査票へ改訂

【調査対象】

- 短大生調査（JJCSS）に2008年度から2012年度までに1度でも参加した77短期大学

⇒　そのうち4短大から聞き取り調査

※ ただし、1短大のみスケジュールの都合上、同様の内容で質問紙調査で実施

【調査方法や時期】

- 半構造化インタビュー法（概ね1時間程度）
- 2013年3月下旬から7月下旬

## 【主な質問内容】

- JJCSSへの参加理由
- JJCSSにある関心のあった設問内容や項目
- 学内で実施している学生調査の種類
- 調査項目数や実施時間への意見
- 調査実施方法
- 返却データの活用場面やデータ分析環境
- 調査データ等のフィードバックに関しての意見・要望

# ヒアリング調査結果①

- 調査参加理由
  1. 短大の機関評価等への利用
  2. 教学評価等への活用
  3. 自大学での独自調査が困難

- 関心の高い設問内容や項目
  1. 学習（学修）成果
  2. 短大満足度（教育／施設・学生支援）
  3. キャリア意識
  4. 進学理由

# ヒアリング調査結果②

- 調査票の項目数や実施時間について

従来の調査票：大問36（全235項目）
実施に大きな負担が生じている

- 返却データの活用について

→　学内のFD委員会や教務部会、自己点検・
　　自己評価の会議等で回答結果を検討

ただし、主な利用は単純集計にとどまり、人員の理由から統計分析まで至らない

- データのフィードバック方法について

全体との比較及び、類似短大・大学と比較できる形式でのフィードバックに高い需要

# ヒアリングからの考察①

- 短大が調査に求めるニーズ

＝　学習（学修）成果、満足度など、短大生が短大から受けたインパクトの把握したい

⇒ 近年の高等教育政策や認証評価等で求められている教育の質保証を図るため、基礎データとしての学生調査への期待の表れ

# ヒアリングからの考察②

- 現在の調査票への危惧と改訂の指針

⇒　設問項目の多さや回答時間の長さによる学生への負担や調査データの信頼性への不安

☆　先の学生調査ニーズ（成果や満足度）を調査のコンセプトとして、設問内容を精査

＝　自己点検・自己評価や教学・学生支援サービスの改善に使える問題解決型学生調査の設計

# 試行調査について

# 試行調査改訂までのプロセス（ニーズヒアリング調査以降）

- 分析チーム内での調査コンセプトの設定（ヒアリング＋基礎集計等経年比較）

⇒　短大生の学習（修）経験・成果に特化した調査へ

- JJCSSとの継続的な観点も残すため、設問内容や項目等のベースを引き継ぐ（学習成果、進学理由等）
- 研究的内容の設問や質問の意図が伝わりにくいものを削除（親学歴、価値観、同年代層との能力比較）
- 回答のしやすさを重視し平易な表現に文言修正

# 試行調査の作成と実施

- 2008～2013の調査から得られた様々なフィードバックをもとに調査票を大幅改訂
- 学習経験、学習成果、学習環境など、需要の高い質問項目を増加
- 研究要素の強い項目や、不必要な項目、重複している項目等を整理（個人の価値観や志向性、家族学歴等）
- これまでの調査との関連性を維持しつつ、実施者（学生）とデータを利用する大学側の負担を軽減
- 大問36（質問数235）→大問26（質問数144）に

# 試行調査の実施内容

- JJCSS調査参加2短大＋未参加短大2校の計4短大（人文・社会系２、教育系１、その他１）
- 実施時期：2013年10月～12月
- 参加人数：733人（男10.4%：女89.6%）
  学年：1年生475人、2年生以上277人
  専門分野：人社498人、教育167人、その他68人

# 試行調査の内容

| 設問番号 | 設問内容 | 回答数 | 設問番号 | 設問内容 | 回答数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 設問1 | 性別 | 1 | 設問15 | 短大教育の満足度 | 9 |
| 設問2 | 年齢 | 1 | 設問16 | 入学後の知識・技能の変化 | 26 |
| 設問3 | 在学状況(学年等) | 1 | 設問17 | 職業選択時の重要度 | 20 |
| 設問4 | 通学時間 | 1 | 設問18 | 将来の職業とキャリア | 1 |
| 設問5 | 志望順位 | 1 | 設問19 | 就職活動の現況 | 1 |
| 設問6 | 進学時の入試方式 | 1 | 設問20 | 学内の経済的援助の有無 | 1 |
| 設問7 | 進学理由と重要度 | 19 | 設問21 | 学費等の経済的負担主体とその割合 | 3 |
| 設問8 | 進学アスピレーション | 1 | 設問22 | 学生生活の充実度 | 1 |
| 設問9 | 授業における経験の程度 | 17 | 設問23 | 他者への自短大の推奨度 | 1 |
| 設問10 | 成績状況(自己評価) | 1 | 設問24 | 短大総合評価 | 4 |
| 設問11 | 今年度諸活動に費やした時間 | 6 | 設問25-1 | 父親最終学歴 | 1 |
| 設問12 | 教員の関与の程度 | 6 | 設問25-2 | 母親最終学歴 | 1 |
| 設問13 | 今年度の量的な経験 | 4 | 設問26 | 女性の生き方についての考え | 1 |
| 設問14 | 設備やサービスに対する満足度 | 14 | | | |

# 試行調査結果の検討

I. 各設問項目度数分布の検討（JJCSSと試行調査の傾向把握）

II. ①学年、性別等の独立変数とのクロス集計
②設問項目間の相関等の把握

III. 試行調査実施後アンケート内容を踏まえて、 回答傾向を再度検討

⇒ 上のプロセスを経て試行調査項目内容を精査、質問回答数を絞り込み

# まとめ

# 実地調査（インタビュー等）を進めて分かったこと（1）

- データからわかることの限界

研究者は、前年度や経年比較をして、疑問を持つことは出来るが、結果の「なぜ」については分からないことも多々ある

- 現場の人は細かなデータからも情報を得られる

研究者としては違った視点で情報を見ることが出来る。実際に仕事に携わっている人が情報にアクセスできる重要性

# 実地調査（インタビュー等）を進めて分かったこと（2）

- 「外部の目」の重要性

自己点検評価は、ある種の自己批判をすることになる。コミュニティーが比較的小さく、相手の先生の努力や尽力が見れる中、評価担当者が批判をするのは難しい…

学生調査の結果を学外の人間が示し、それをもとに議論をすることは有用（IRerがやるべきことかもしれないが、専門職制が確立していない日本にはフィットしないのでは？）

# データ活用のポイント

- 短大のことを一番よく知っているのは各短大の教職員の方々
- 専門家以外でも活用できる形に
- 単純集計からでも見えることは多い
- 重要なのは継続性とデータの見方
- 外部の意見の有効活用

# 今後の課題（技術面）

- ベンチマークの可能性と課題

参加しやすい調査から活用してもらう調査へ

→ベンチマーク不可欠

→1学科に複数コースある短大の教学組織

→専門分野の整理

- データフィードバックの在り方と活用方法や事例紹介の方法（ワークショップ等）
- 短大の独自性を活かした調査活動、その先の評価活動（短大型IRや教学改善）
- 用語の見直し

# 今後の課題（総合）

- ユニークな日本の短期大学
求められる日本の実情に合わせた調査

- 問題発見・解決に特化した実用的な調査
リサーチベースの調査からの転換が必要

- 低コスト・低負担で大学のより良い改善を可能にする調査を

- 調査の運用・実施の双方において継続性を担保

# 調査に関する連絡先

大学生調査研究（JCIRP）プロジェクト
短大生調査分析チーム


- 山崎慎一（桜美林大学グローバル高等教育研究所）
（E-mail: snicy@obirin.ac.jp）

- 堺完（同志社大学大学院）
（E-mail：osakai@mail.doshisha.ac.jp）